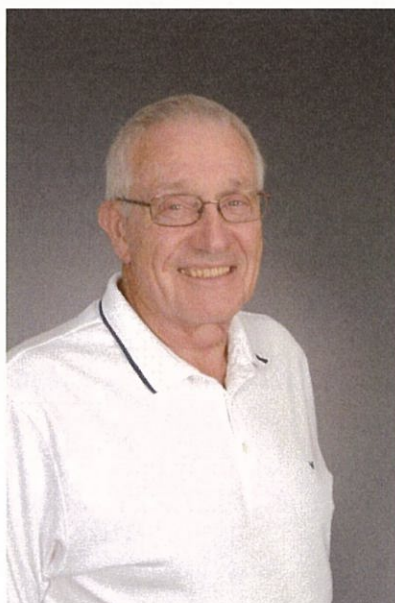


追悼 ドクター ホドソン～ホドソン博士との思い出～

米国のみならず、日本の、世界の養豚・育種の牽引者とも言える Dr. Harold H. Hodson, Jr. が 2018 年 9 月 23 日、お亡くなりになりました。(享年 79 歳)

国産純粋種豚改良協議会では、ホドソン博士に敬意を表し、日本円で 1 万円を日本で言うところのお香典として、葬儀に参列した桑原会員に届けて頂きました。ホドソン博士の生前の意思で、アメリカで養豚を学ぶ学生への教育費に寄贈されました。ここで会員の皆様にご報告を致します。

今回は五十嵐会員と葬儀に参列した桑原会員より寄せられた、ホドソン博士への思い出や米国の豚肉事情なども併せてご紹介いたします。



Dr. Harold H. Hodson, Jr.

<https://www.grandonfuneralandcremationcare.com/obituary/272080/Harold-Hodson-Jr/>

(写真は上記サイトより)

「ドクターホドソンの思い出」

福島県：五十嵐農場 五十嵐清彦

ドクターホドソンとの出会いは、昭和 54 年の県豚バローショーだった。実に手際良く進める選豚や講評に感激した思い出がある。

その後縁あって、太平洋ブリーディング株式会社の大ヨークシャー種生産を担うことになり、ドクターと接する機会が出来た。それで知ったことは、彼が実に豚を大事にし、そして、豚大好き人間だということだった。例えば、何年も前に気になった豚について、真顔で「あの豚舎の何番目にいた豚、今はどうなんだ」などと言い、我々を度々驚かせもした。

2008 年の SGI (Swine Genetics International) 初訪問の際には、「イガラシ、もっと前に出てウチのボワ (雄豚) をしっかり見てくれ」と強く背中を押してくれたのが昨日のようである。

だから、毎年のように来られるのを楽しみにしていた者として、ドクターホドソンの訃報は本当に残念で仕方が無い。

御冥福をお祈りするばかりだ。

ありがとうございます、ドクターホドソン。

※五十嵐氏寄稿文を事務局にて一部加筆修正させていただきました。

「SGI 前社長 ホドソン先生 追悼記」

静岡県：農事組合法人 富士農場サービス 桑原 康

ホドソン先生、ホドソンさん、Dr. ホドソン。日本でも知らない人がいないほど、種豚家、養豚家におなじみのアメリカの SGI 前社長である Dr. Harold H. Hodson, Jr. がその人であり、世界の育種、人工授精の研究家、実践家であり伝道師である。

そのホドソン先生の葬儀が去る 2018 年 10 月 6 日に、アイオワ州エームスの St. Cecilia Catholic Church にて行われた。ホドソン先生は私にとっても 40 年来の師であり、私も葬儀に参加させて頂いた。葬儀には、太平洋ブリーディング株式会社、株式会社フリーデン、グローバルピッグファーム株式会社、株式会社ナスアグリサービス、そしてホドソンファミリーなどホドソン先生ゆかりの皆様が参列された。

参列にあたり、国産純粋種豚改良協議会から日本で言うところの香典を供えさせて頂くことになり、会を代表して持参したが、ホドソン先生の生前の志で、これらについては、アメリカで養豚を学ぶ学生への教育費に寄贈されるとのことであった。師の養豚への情熱に頭の下がる思いである。

余談だが、協議会事務局の一般社団法人 日本養豚協会の前身である日本種豚登録協会より、2003 年 5 月 16 日、アメリカからの生体種豚と精液を提供して頂き、日本の純粋種豚の改良と養豚に多大な貢献をして頂いたお礼として、盾の感謝状を贈らせて頂いている。そういった点でもホドソン先生と国産純粋種豚改良協議会は以前からつながりがあったと言えるのではないかな。

本稿では、私の知る限りの師のこれまでの活躍と、御世話になったことや今回の訪問で得た新しいアメリカの話題を紹介させて頂きたい。

ホドソン先生の略歴と日本の関わりを年表にまとめさせていただいた。この紹介は概略であり、年号や時代背景が雑ぱく、ずれや誤解もあるかと思うが、その点は諸先輩の皆様方の補正をお願いしたい。



葬儀にはゆかりの人が多く訪れた



葬儀会場にはホドソン先生との写真や業績が展示されていた

【Dr. ホドソンの略歴】

1939 年 3 月 20 日 誕生。

1959 年 12 月 デキシー夫人と結婚。

1965 年 アイオワ州立大学にて家畜栄養学の博士号取得後、アメリカ空軍に従軍。元々は宇宙飛行士を志願していた。

1968 年 アイオワ州立大学の養豚普及員となる。

1971 年 この年から 10 年間、南イリノイ大学で教鞭を執る。その間、国内外で共進会の審査員を数多く務めた。また、その他数多くの養豚教育に携わった。

※1972 年 神奈川県平沼克己氏が養豚研修のために渡米。

※1975 年 アメリカでは初の豚人工授精所 IBS が設立された。

この頃、日本人のアメリカへの種豚購買が活発で、ホドソン先生が輸出を介助。神奈川県綾瀬家畜市場では全豚バローショー、神奈川県豚バローショーが開催され、ホドソン先生がショーの審査員をアメリカから送り出したり、自ら審査員として来日されている。

※1977 年 私、桑原が初めてアメリカのルイビルバローショーで種豚購買。

1981 年 SGI が設立され、初代社長にバクテル氏が就任。

神奈川県にホドソンファミリー設立。

その後、ホドソン先生が 2 代目 SGI 社長に就任。

当時の種雄豚 60 頭

(デュロック 10 頭、大ヨークシャー 13 頭、ランドレース 7 頭、ハンプシャー 15 頭、スポッテッド 2 頭、チェスターホワイต์ 5 頭)

SGI は以降、台湾・韓国・メキシコ・中国へ進出し、日本でも太平洋ブリーディング株式会社、株式会社フリーデン等が株主となる。

2003 年 日本種豚登録協会 (現在の一般社団法人 日本養豚協会) から感謝盾贈呈。

2016 年 SGI、ニック氏が 4 代目社長就任。

2018 年 9 月 23 日 ホドソン先生没。享年 79 歳。

【SGI 社訪問】

10月5日通夜の日午前中はSGI社を訪問し、最近の養豚情勢を聞き、代表的な種雄豚の展示視察させていただくことになった。

まず、SGI社の講義室ではアメリカの最近の肉質の話題として、次の3つが提供された。

①肉牛生産者が、サシの多い牛肉を個人的にレストランに直接販売を始めたところ、アメリカでも評価が高くなり、赤身嗜好からサシ、軟らかさ、おいしさへ方向転換する消費者層が増えてきたとのこと。

②コンパートブリーディング農場がポークカラースタANDARDや、マーブリングスコア(保水性が高い)表を活用しながら、まだあまり周知されていない問題を生産者と消費者が共有した勉強会を開催した。この話題性は高く、対面販売の成果が出てきた。日本では既にある信頼関係に寄る販売方式だが、アメリカにおいては珍しく、これまでのパッカーの都合による赤身生産流通・嗜好が疑問視されてきており、今後見直しされていくだろうとのことだった。

③SGI社のニックとマイクにより、最近、と畜後の枝肉の冷却に要する保冷時間と温度によって蛋白質の変性する影響が大きいという調査研究がされているとの話題提供があった。

種雄豚の展示においては、代表的なバークシャー3頭、デュロック5頭、ランドレース4頭、大ヨークシャー4頭、F1及びショータイプを見せて頂き、そのレベルの高さを再認識した。



近年、アメリカでも豚の肉質が見直されている



SGI社のランドレース(雄)

【ランチタイムでの R. クリスチャン先生の意外な言葉】

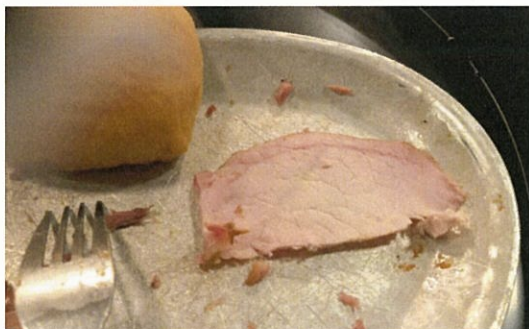
SGI 社訪問の際は必ず寄らなければ気の済まない BBQ ハウスがある。HICKORY PARK では、牛・豚肉の T ボーンの 300g、400g が当たり前に食べられており、それにビッグポテトやパン、スープ、サラダを注文するのであるから満腹となる。ホドソン先生と家族ぐるみの交流をされていた元アイオワ大学教授の R. クリスチャン先生は、ローストポークを注文されていたが、そのロースの一片を皆に配られ、さらに意外な言葉が飛び出した。5mm ほどにスライスされたロースの 1 枚が「パサパサでまずい」と言うのだ！ 味付けでうまさを表現してきた BBQ ハウスなのだが、クリスチャン先生は、最近のアメリカの豚肉はリーンが行き過ぎたとも嘆いておられた。味付けでもカバーできないほどの筋肉繊維の粗さだった。



HICKORY PARK でランチタイム



パッケージされた豚肉



クリスチャン先生に頂いたローストポーク



ほとんど脂肪がカットされている

【通夜は親交と思い出話】

通夜といっても、ホドソン家に承諾をいただいた昼食後 3 時の訪問となった。日本のいまだきの葬儀場での御通夜と違い、ホドソン家にはデキシー夫人と家族全員がおられて、ホドソン先生が元気な頃に御世話になった昔話、親交や思

い出話などをかわし、故人を偲んだ。1943 年発刊の Duroc News、改良の遍歴資料等を用意して頂いており、悲しみの中にもひとつの安堵感があり、皆様方との集合写真を得てホテルへの帰路を辿ることにした。

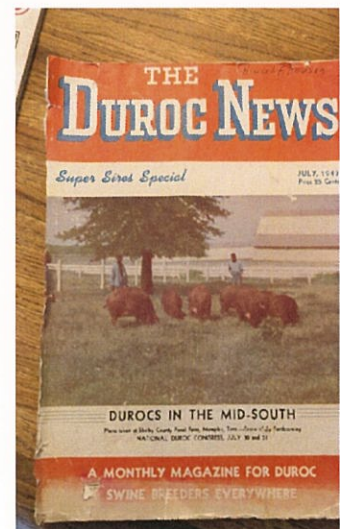
その後は、なぜか!? 日本ではなかなか会えないのに、海外では会う機会の多い先輩諸氏、SGI 社スタッフと豚談義の夜食を取った。

SGI 社のニック氏とマイク氏は常に日本のマーケットを訪れて多くを学び、御客様が何を求めているかを考えて種豚としての素材を提供すると言っていた。また、育種は時間とお金がかかり過ぎて、2 世代も 3 世代をも要する、とも。全員の総意である。



みんなで記念撮影

ホドソン家への弔問。昔話に花が咲いた



見せて頂いたデュロックニュース

【葬儀】

翌日の葬儀は、教会での開催で、玄関を入るとホドソン先生の思い出や業績、2003年の日本種豚登録協会の感謝の盾も展示して頂いていた。参列者の服装は平服が多く、1時間の式の後には式場隣室にてほぼ全員が参加された着席でのバイキング会食があり、生前の交友が深かった方や現 SGI 社長のニック氏が、故人を偲びながらも笑いを誘う話などを披露し、約1時間で終了した。

デキシー夫人、御家族、関係者の皆様と SGI 社の発展とともにアメリカの養豚の発展を祈るばかりだ。

ホドソン先生には長い間の貢献と教えに感謝しながら、御冥福をお祈り申し上げます。

ありがとうございました。ホドソン先生。



デキシー夫人と筆者

※桑原氏寄稿文を事務局にて一部加筆修正させていただきました。

※写真はすべて桑原氏提供です。

事務局では、会員・オブザーバーの皆様からのホドソン博士への思いや思い出寄稿文をお待ちしています。特別編集第二号も予定していますので是非、お送りください。